上聖人語附錄

下

8
166

東京圖書館
東京圖書館藏

類	屬	函	架	号	冊
		八	六	一六六	一

東京帝國大學圖書館藏

志斐語附錄下之卷

平朝臣玄道記

○ふゝ形

ふゝのわざにも。をくつとめ。

形ほくたゞしき。ひゝそゞゑと。

人の此の世ゝ。生來(ウマレキ)つるゝ。偶(タマ)然ゝ似て。偶然ゝてかくゝいの形ゝ工匠(タクミ)れ名人ありて。巧思(タクミ)ゝ窮盡して。數百日の工(タクミ)を以て。作出せる生人形(イキニンギヤウ)ゝてめ。それ似(ニ)ると。活(ハタラ)くのゝにて。心(タマ)魂(ヒ)かけれゞ。言語も應對もえせざゝを。人ゝ四肢百節ゝ。一ゝ不具(カタハ)の有(ル)ゝとれく備受(ケ)て。形躰を爲して生(レ)ると。實ゝ

妙かる上ニ又心魂といふ物を附賜たゆて。此の主君とし
て。それ形ニ比ゐてハ。又遙ニ奇々妙々かる物ニて。その主
君故ニ。一身のこの人衆を治めもし。万人ハ師表とめ成る
ゐなどの物を。無造作ニ造成せるハ。父母ハ恩のこニを
あらば。根元をいゑだ。皇祖天神の甚微妙ニて。思議しがと
く。推測をべからぢる御霊徳ニ因て。生出とる物ニて。かの
佛まゐ聖人等ゐ。數百人集ゐて相談ちてめ。そ玄奥義ハか
ゐて知らぬゐき事ニあらぢと。先師等ハ説の如きかゆ。此
事ハ急ニ説盡をべくも非ざれだ。姑く差ぬきて。先かゝぬ
微妙の身躰ハ得て。かく食て衣て家ニ住み居るを。盡くニ

天神地神を。天朝の御蔭ニ非るハ。一をして无きれゐ。故て
鳥獸ニてめ。受くぬ恩ハだ報ぜるも有れだ。況て其上ニ立
居る。人間としてはその分々ニそれ職業を務勵みて。その
大恩德ニ報奉る事を。謀ぢあゐゐのらば。凡て天地ハ間
にゐる程の物。皆職掌ちき物とてハ。ぬを道理ニて。天神地
神の御德業ニ因て。四時晝夜め成ゐ。人物百穀鳥獸草木も。
生々化々し。天子を始奉ゆ。王公大人も。各その職業ハ怠懈
給をぬニ因て。天下の万民も安泰無事ニ。其御德化ハ感戴
をるをとかれだ。それ下民をして世ニ生活ぢる者。いのて
徒ニ手を束ね。安閑とちて。日夜ハ送ゐゐしや。是を以て神

官ハ神祭を以てし。士ハ武事を鍛錬して。国家の干城ハ為
ア。農ハ四時の氣候ヲよく考ヘて。土地ハ便宜不便宜を知
アて。早晩とれく耕種して。飲食の大本ハ五穀。ハ諸穀
等を作出し。工匠ハ。家室及器物ヲ造て。成さけ精巧工夫を
凝して。何物も他邦ヲ仰がぬ。全国中ハ事足ぬ。ぬく精究
して。必用の器を造出さべく。商賈ハ。多分の利ヲ取らぬ。物
ヲ下直にしハ。有處をゆ无處ヲ轉じ。雙方共ハ益利を得る
様ハ謀ぬど。皆それ職分をよく守ア。棄懈らぬ。奸術虚偽を
除去て。公平正直ハ工夫を加て。務め行ヘだ。かせぐハ追つ
く貧乏ハしといふ諺れ如く。その分々ハ一家を治めて。父
母を養ひ。妻子親族ヲ恵むかぞれ活計を。自ら神祇をゆ賜
へる事ハて。おまこ己ていへる祭事れ一端ハぞある。さ法ヲ
武士を。放蕩のこ盡して。君臣父子の大道れ何物たるめ。俸
禄の何故ハ賜れるめ解せず。武備も兵法も一向ヨ解ぬ。
農ハたて。耘耨を事とせぬ。工匠ヨて。人れ依託にめ怠ア。或
を作器の疎麁ハて用に中らぬ。或ヒ無用の長物ヲ作ゆ出。
商賈ヨて。猥ハ高利ヲ謀ゆ。或を欺偽を巧にして。財貨を貪
ア。二量贋權を用ゐかど。凡て惡心穢行もて。得さる富貴榮
華ハ。風前の燈春日れ霞ハ異ならぬ。長者三代れしをいふ
諺の通ハて。必ぬ天神地祇の御罰ハ中アて。子孫の代ハい

凶盡して仕まふ事。今古ふそれ例あげて數ふめ盡されぞ。
ちらぞ如何にして。眞の富貴を保つべきぞと云ふ。正直忠
誠にして。陰德を積ふ如きされし。小惡ふても積ゆても大惡
と成ゆ。小善ふても積ゆては大善と成ること。塵積ゆて山
と成ゆいふ。譬の如くかれば。心中ふ惡念れ萌ゆも。妖鬼ふ
見おまれて。妖鬼ふ陷る邪路かゆと。此を甚恐れ猛省して。
此を自反し。過ふ改免て。善ふ遷れぞ。皇大神の見直し。聞直
し賜ふ事は。大祓詞を拜見して知るはし。是を以てそれ心
ふ赤く清くなて。假初ふめ奸曲邪佞を懷ゆば。正直ふ忠誠
にして。其職を怠るおとふく務めて。及ぶだけも。他の病苦

貧苦。種々の艱難をぞ。相憐み相救ひ助けて。慈仁ふ加ふる
ぞ。富貴榮華を永く保ち。子孫ふ受傳ふるのみからば。
後生にも。善神と成て。无窮の大福ふ受ふ所以ふぞ有ける。
凡そ人は正直ふ第一をゆべき事。皇祖天神の御誨詔ふ出
て。古人め何くれと云ふる事多く。近世ふも加藤清正ぬしぞ。
剛者をかしく思ひ。一生れ閒人相なさふ稽古して。目
利ふ心を盡されしかぞめ。其術ふ得ぞ。惟律儀者ふ武者多
しと云れ。加藤嘉明も。氣先のけふぎかる者ハ。人目を驚
ゆ程れ働を爲ゆ雖も。ふみ誥さふ武功も。律儀者ふあゆ。譬
ぞ賴みもかく。主の盛衰ふ。人々二心ふ持中ふ。獨義を守ゆ

て。心變をかな強みを。律儀者れらでた无き事かゆ。諂者ハ譬ひ万一ふ。一旦武邊あゆてめ。曾(カツ)る賴こふからぼ。主の出頭ゑ心がけ。知行を取ゝ人ゑ笑たるゝめ。恥と知らぼ。又恥ゑ愧のしをめ思たぬ者を。主を殺しても。身れ爲をき事から だ爲にゐきかゆ。僞と貪とを。器ハ易(カハ)れどめ。落著ハ仝事かゆ。と云れ。池田光政主も。諂者ふ知行ゑ與ゑ置を。盗賊を抱置を仝事と云れし。と雨夜の燈火ゑ見え。板倉重矩ゞ語ふ金銀衣服を掠奪ふ者を盗と號ゑど。熟案ふゑ。大名ふ盗多し。下土民の善行あるを舉ぼらして棄置を。是人の善ゑ盗むふ非ぼや。親族朋友ふも。人の善ゑ取あげぞして過るは。是め人の善ゑ盗むかゆ。中ふも主人とる人た。下れ善ゑ揚ぐゐき役を。天道とゆ命ぜられたるふ。人れ善を盗て。天命の役儀を闕を。盗の大かる者かゆ。と云と仝書ふあゆ。案ゑさる言ども。江戸禁談を云物ゑ。伏見かる辰巳屋久左衛門といふ。豪商の先祖を。伏見河舟の船頭ふて。至極正直かゐ者かゆ。或時船中ふて金袋ゑ拾ひ持歸と。其金を明てめ見ぼ。直ゑ大神宮の棚へ上かな。三年の間毎日何卒。此金主知らせ賜ゑと祈とをかゆ。三年目ふ久左衛門船れ。大坂ゑ住居して。炭薪諸圍をゆ廻し候。大問屋乘合候處。大問屋。久左衛門ふ物語申候を。此邊ゑ二三年已來。俄(ニハカニ)分限ふ成候者かどは。无之哉を尋候ゑだ。久左衛門成程有之候。此河上ふ久左衛門を申船頭御坐候。三年以前船中ふて金ゑ拾ひ。俄分限ゑ成候と申せしかだ。右の問屋船をゆ上と。船頭久左衛門宿

を尋て參り見申候へば。先小咄申せし船頭の久左衛門か
ゟ問屋驚き何を船中よりてゝ。他事の樣小申たるやと申候
ゟば。久左衛門船中よりてゝを乘合め多く有之候ゟば。委細咄
し難く宿小て篤と物語致候ゟ存じ。外れ人の樣ゟ教へ
申候とて。段々咄し三年以前船中小て。金袋拾ひ候へども。
主知を申さゞ。氣の毒ゟ存候ゟども。其儘捨置難く。拾ひ候
儘ゟる。直小大神宮れ棚ゟ上置ゟの金主何卒知れ。返し申
度段。毎日祈念申候處。願の通今日其元ゟ出合申事れ嬉し
さを。て。殊の外悦び。直ゟ彼金袋れ儘。問屋ゟ返し申せば。
問屋も久左衛門の志深き事を感じ。我元を尋落し候事も

時節かゆ。貴殿の拾れしも時節小て。授られし事かをば。是
非取まじ。其上我等身代小て。是程の金失ひ候を。て。少も障
る事れし。貴殿の物小致されをと云ひしかゞめ。久左衛門
莵角合點せゞ。問屋ゟ戻し候小付。問屋も致方なく請取ゟ。
扨め貴殿を古今珍敷人哉。然らバ只今れ業れ相止。我等方
ゟ參られを。我何れとも能樣小計むとて。久左衛門夫婦共
に召連。問屋方小差置。炭樫の商賣致させ候處。右の善事れ
恵を小や。久左衛門ゟる程の事仕合をく。段々分限小成ゆ。
當辰己屋久左衛門まで。三代の内二百万兩れ身代小成ゆ。
手代め四百六十人餘も抱へ。大坂ゟて無雙の分限小ぞ成

きるといふ事め見え。或人の歌ふ。直なる様。守るを聞だ。何事め。神ふまかせる。身こそ安をれと詠ぷ。はゝ何職業ふても。恪勤ふてらでも。成就する事なし。神代の天神地祇等も。更にも申さぜ。聖賢君子とめ。豪傑名將相を呼れし人も。皆堪忍を恪勤ふ因る。素志功業ふだ果されしかゆ。かの怠らぜ。往だ千里のはても見む。牛の歩みれ。をしたそくとめ。といふ歌の如く。人れ一さびせば。我れ百度し。人十度せば。我れ千度せむと様ふ強行だ。柔者も強く。愚者も智ふ成る事。古來數多め盡しがゝし。南都明詮僧ぢ。殿閣の軒下ふ雨宿をを。軒をゆ落る雫ふて。石の窪をたふ見ゝ。奮起して明

匠と成ぷ。世ふ小野道風主も此ふ似とる傳あれど。實否をいまゞ考得ぜ。大田持資ぢ。民家ふ蓑借ふ入る。一女子の山吹花ふ折出しを。何事とも悟得ぜをて。初て學ふ向ひしれぞも。道こそ異かをそれ志業ふ於てを。感賞をゞなかゆ。ゝ恪勤の事ふ因て思出さゆ。鳩巣小説ふ。永井信濃守段々取立られ。召仕る時ふ。井伊掃部許ふ往て申るゝは。私事御厚恩ふる。結構ふ被召仕候。夫ふ付御奉公筋。何事にても平生心得ふも成候義有之ぢ。被仰聞可被下候。最初をゆ御一言ふも承度候へども。何をやらむ諂の様ふ聞候故。只今まで延引仕候。御老人れ義を申し。御舊功れ事故。御一言承ぷ。平生の嗜ふ致度と申さるゝふ。

掃部感じ申され。奇特千万の事ふ候。我等久く奉公致ぶ故。平生心付候義も有之間申入ばし。ぢきどめ率爾よい成ば。精進致され某日ふ參らふばしとく。其日も歸し申さふ。信州其日ふ麻上下著用よて來るす。掃部も仝上下ふて出て。奥間よ仝道ふく。扨申ぶた。油斷大敵ぞ人々申ハ。覺え申さふ〻やと尋るに。信州成程覺えあり。ぞ答るふ。夫の則御自分への傳授ふ候。此一言を二六時必失念有まじとて。後よ尉斗蛇ふど出し。料理振廻むく歸したふとぞ。掃部頭不學ぶる人ふきども。大公望の丹書ぶ。武王ふ傳ずしと仝意よて。武王三日齋戒ふて。此ふ授ぶるふ。怠勝の語意と。油斷大敵の語意と。雅俗淺深ぶ有れども。皆一理ふゆとも云ずぶ。橘春暉の語ふ。人ぞ本業ぶ能勤ぶて。外ぶ事に及ぶぶ善と。ぶ。少し器量ふる人ぞ。我分外の事ふ志して。本業を守らば。少し才氣ふる人ぞ。他ぶ枝葉の事ふ流きて。本業を忘る。如此人ぞ。譬ひ豪傑ふるめ。才子れるも。德ぶ失ふの人ふて。事を成就ぞるふと能ぶず。世ふ益あることれし。人ぞ其分々あることれきば。我本業を能勤め達して。他よ及ぶ暇し。もし本業其心ふ好まぬ。速ふ業ぶ轉ぶし。好ざふ事に居て。ぶろそかふぶべ。のらば。然れども又一生ぶ間ふ。毎度業ぶ轉るぞ。迷の甚しきれゆといひ。老人物語ふハ。銘々先祖を

ア傳ヲとは。商賣を變るは。本意おらぬ事おゆ。譬むいのれ
る身ゆ成やめ。一向ヨ仕來の商賣ゆて。渡世にゐし。不時の
得ものゆてヲ安ゐのらば。外の業ゆて渡世せむと思ふ兆
あるは。終ヲ身代持崩にゐる基おアとめ有ゆ。徳川氏遺訓
ゐへを諭されゐゆ。合考ふゐし。序ゆいふ。森長見ゐ忘貝ヨ。
或人ゲ短慮を戒むる詞ゆ。一ッヨい後悔あゆ。二ッヨい物ぐる
えし。三ッヨハ其愚あらえる。四ッヨい智ある人親まば。五ッヨハ
他人ゆ仇の思ひをおに。六ッヨい器を減に。七ッヨい病を生ば。
八ッヨい爭ひ多し。九ッヨい苦勞多し。十ヨい衆惡發に。猶此外
にも失多し。水戸光圀卿れ涂筆とて。世ヲある文ゆ。仁過を
ゐとわくおる。義過をゐかとく成る。禮過をゐつらひゆ
成る。智過をゐうそを。信過をゐ損をにる。氣を長く。發
めを固く。色うにく。食細くえて。心ひろかれ。一ッ
ゆを大きくをめゐゆ。共ヲ目安き論語ヨおむ。

○やれ

やちをふるとも。たましひれ。
きゆゆよとてを。おきものぞ。

凡鳥獸虫魚ゆてめ。偶その魂れ世ゆ殘在めあめて。祟れ爲
に事ゆをぞ。まして靈物をある人魂を。天地と共ヨ盡るこ
とゆおきれヲ。此を我ゐの古傳ゐかアとゆておく。支那の玄家
の古說にも。天竺の婆羅門。又佛家れ敎へゆてめ。西洋の諸敎
ゆてめ仝くく。皆靈魂い死ゐと云へる。獨漢土ゆて。後世れ
儒者ちふ者ゐ。體と共ゆ消去る物を定めさるれをどめ。甚
愚昧おる言ゆく。かゝ說ヨ必惑さるゐのら。そを師大
人の委說あゆ。玉襷鬼神新論等ゆ付て見ゐし。少其徵を曰むヨ。やゝ古く

き雑談集ふ。信州の或所の地頭。所領の中ふ。有德れ山寺法師ありきる。事を左右ふをせず。資財を悉く掠取けり。鎌倉ふ上りて訴へられぞめ。達せびして病死せり。彼妻ふ靈託て。疾狂む口走る。我過かたをかく惑しえてゝれたる。口惜られど。女房を取殺ゐし。次ふ殿をも。子息等も。一人も殘かく取死にゐしを云ける。事躰恐ろしく。冷しく覺えて。人の云事を實と思ひて。无沙汰れ事有りり。資財物も盡く返して。神ふめ祝ひ。菩提ふも吊ふ。心行きて助給ふと。度々立伏云られぢちと寛く成きり。げふやと云ふ力付て。夥く誓狀して。神ふ祝ふゐる由云ふ時。心往き。ちらぢ後世め吊ひ給ふ。我身れ執心も由れし。神と祝む給えむことも然るゐし。鎌倉ふ。濱の大鳥居ふ打たりし釘取出し見せ奉むとて。たらひ取をせず。三四寸計の釘吐出して。此打たりし石め見せ奉らむとて大石一ッ吐出さゆ。恥かしきれどめ。我姿をも見せ奉らむとて。物ふ吐出さる蛙ふゆけり。驗者此を取る。竹筒ふ入藏めて。かぐられど作て。資財悉く返して。祝て侍ふかゆ。近き頃の事ふり。此れ土佐國ふる法師の故有て祟をふし。君敵社と祝ひて。今も在といふふ能似たゆ。まて物を吐出さること。仝書ふめ見え。空華日工集ふも。應安五年二月十二日。三品話。嘗宿京之今熊野山伏者某。爲某女人祈邪氣。女人口吐出鐵釘。又吐出一物。乃楊枝并眉造者。以其女手書和歌故紙而纏之。稍見其物。逡巡而沒云。ふ有るべし。まて武者物語ふ。長尾謙信の家

臣柿崎和泉守の織田殿の策に依て謙信の怒にあひぬ。此を殺しきるにそれ亡靈現れて程なく取殺されしこと。番幹譜に此を妄かめとて甲陽軍鑑の詩句をひきて辨ずれど或は織田氏の刺客れ爲に殺さるともいひ川柳点にちと紙をもむで謙信逝去かめと作れど或は武田氏げ或僧に命じて咒詛に依て亡れとも云ずれど皆信られず豊後国石垣原の戰に大友の味方吉廣嘉兵衛尉をいふ者黑田氏の軍に向むて片候にとて井上某を戰ひて死に其墓別府に在て瘧を病者祈きて必治にと記し。まと元祿の頃に攝州尼崎の城主青山氏の老臣木田玄蕃の婢菊といふ女或時玄蕃に食を進めけるに其飯中に針あり玄蕃大に怒れて余を害せむ爲かりとて。やごて縛れて其井中に投じて殺しぬ菊の母聞付て忽走來て佗言せむをせしに己は死ぬと聞て大に恨みかいちて悲この餘れて又その井に投て死に爾來木田の家様々れ怪事あり祟を爲しけれど青山氏へも聞えその无道れ振舞言語道斷かりとて惡れきかに記せるえ此と異かり江戸番町かめ菊女れ皿やしきの事あり。因果物語に紀伊国にて。或人の妻難産にて死に然どめ子を生きて息災かり彼母の亡靈來れて子を抱き乳を呑せ三歳にかるまで育をり。女房十七歳にて死をるこの三年過てめ十七歳れ形に見えたり。又攝州大坂の近所に死とる本の妻來て子れ髪を結

たと三年ゐゆ。或時來て。今の女房れ舌を拔ける間。樣々養性して能成て。離別して他所へ行しをぞ。又伯州れる。江口殿といふ人。十六代目ゐ。高麗陣ゐて討死し。十七代目ゐ家ゐぶ。十五代目の塚。泊といふ所ゐ在ゐ。元和中ゐ。泊の代官次郎兵衛といふ者。屋敷の上ゐ塚あるを嫌ゐて。堀くづし土一丈取捨さるに。それまゝ煩ひ付。无言ゐ成さゆ。一門驚ひて。定めて塚主の祟ゐからむをて。所れ老人を聞くゐ。老人ども病者の面を見て。此面色眼指の躰疑ゐき殿樣ゐゐされで我等の如き者ゐ。直ゐ物御申を成さるゐじ。菩提所の僧を賴まれをといふゐ因ゐ。即呼をれで。即云く。此者我の塚を堀崩し。地を穢れ事口惜し。一門殘らず取殺ゐしと憤ゆて。終日樣々佗言ゐれをめ叶たず。漸一門計を許され。次郎兵衛ハ。片時も延さゞをて。即取殺しぬ。ゐと寛永十八年。大坂桁屋町ゐ。長右衛門をいふ者。久く煩ひ痩衰ゐて。終ゐ死ず。一町東の吳服町ゐ。三節と云醫者。永々藥を與ゐけれどめ。子共貧人ゐれで。少の禮をもせず。然ゐ其年三節御城をゆ下るゐ。御門前ゐて長右衛門待迎ゐて云。永々御藥下されをれどめ。子共終ゐ御禮をも申さず。誠ゐ御恩忘難しと云ひて。愼て禮ず。三節見て苦しからず。再度此念を起ずゐとて。二足三足過る中ゐ。形れしと。直談ゐ聞くと云

ひ新著聞集ふ大内義弘ゐの在京れ時玉屋といふ糸屋の娘ふちぎゆ歸国れ時ゑれゝ下らまかしききど礙る事あれば迎ひる人を上きべしと云てゆをかくゑて打過しを女思煩ひゝ身まがゑぬ父母哀ふかたへゞ發心しきゆかゝふかの女周防れ山口ふ至ゆ義弘の許ゑ御跡を慕ひ下ゑたる由ゑ云入しのゞ義弘女の身ゆして遥々れ旅泊ゑ凌ぎてをくいそ來つきゆて妹背の契あさからぢゑし中ふ一人の男子を設けゝゆそれ子三歳の時ふ世を逃れし父母修行の身と成て周防ふ下ゑかゑゝいふゝ徘徊せしふ相知れる人ふのひ娘ふおくれて嘆ふたゑゞかく貌ゑの

ゑ侍ゆちきゆの殿の御事ゑ思ひたゑて〻そゝがらめ見奉らむと下ゑしと語ゆて泣けれゞ其人手を拍て不審の事かふ足下れ息女きふゑふ下ゆ給ひ若君出來はや三歳ふからせ賜ふきて殿ゑかくと告しのばそれ召せとゝ迎ゑ取ゆ女ふ汝ゞ親ゆめ來れゑ出てあゑと有しのゞ一間れる所ふ入て衣引かづき伏たゑしを行て見きゞ五輪一基有て女き見えゞ義弘も大ふ驚ゑあれふ思ふ甚く跡ゑ吊ゑふ其男子長じゝ石丸某と名づく石丸氏の祖ふゆ。玉滴隱見ふ此と相反して死せるゞ子无き事を憂ひて夜通きて兒ゑ産る詣を載せゆ。万ゝ延寶年中。奥州二本松の藥研屋久心といふ者庭を作ふきゝ正念寺

の山に古き石塔に苔生たるあるとして取てせ立きたるを。恐ろしき夢を見る事度重なるとして或時晝いねたる夢に二八ばかりなる女の枕元に立て殊の外怒れる氣色にて。いのちをぞ我が久く住なれし所に引放ち此へ来る。ぞ此恨少からじと叱みし眼恐ろしく胸打ちわぎしに傍人おこして漸目をちまし。かくと語けるに老たる者云ぎ。たゝ八十年程前に此所は畠山重次を聞えし人あり其女子十七八にて死しに葬るとし塚を我親語りしは早く其石塔を本の處に返し立てと教へしかば返し立て後夢見ることなしとかゝ信州さはの町人妻に後れ後妻を迎へて前妻の子に江戸に出し奉公せさせきる。或時男他所に出けるに先妻は行あひしに妻の云く今の女房に早く離別にてゝし御身に爲に惡き者なり我全く妬て云に。きのちに彼の來て以來物おと心のまゝに有ばのちに此にて思ひ知と給へ又せがれも江戸にて限は煩ひ待る。やのて死ぬぎしを云て別きける夫をゆ江戸は人を遣てしきれに云しに違いに子煩ひるがどれく空く成れゆ此に驚きて今の妻に離別しけるをいひ菊居隨筆に云く昔きたらに近代見及たとし崇とれ嚴しきものを明和の頃河内國石川郡山田村に喜右衛門といふ百姓の豪富にし

て油坂絞アと。大坂ヨ出シに。此宅れ前栽ホ。石川の山田麻呂の墓あめ。庭を作るヨ邪魔ホ形ふとて。あぐきしホ。忽鳴動したアとしホ。搆(カマ)えば取のけしが。段々をからぬ事どめ打(ウチ)ぬき。大坂ホて阿事あらそきと與力れ内ホめ其黨ホのアて。江戸ホ形れ下アと。鈴ゲ森ホ重科ホ行なれし。其跡闕所ホかアて。買(カヒ)て住(ス)むもの代々崇(タヽリ)アと。今も其宅地あれる。住人ホく草生(オヒ)ため。山田麿程れ貴人ちもあアぬるし。又京の清水瀧の下ホ。寺三院あめて。料理ゑて客ホ座敷をかまと。大蛇杯ホ出して。浪華の浮瀬茶屋ホ寫シに。圓山。靈山等れ時衆寺ホ仝じ。歌中山清閑寺れ支配ホめ。此寺の門前街道向ヨ明き地あアと。三院主申(シン)合せ。其明地ホ座敷ホとと。客を迎むとに。既ホ其地ヨ起シに。小塚あめて。崩(クヅ)にヨ下ホ石棺ホめ。蓋(フタ)をうごかにや否(イナヤ)。大ヨ鳴動して。堀る者唐鍬の柄を打折。絶死に。其音ホ驚れ。半町計上ホ係。稲荷神主絶入とめ。扶企(クハダテ)たアし。三院れ住僧い。寺内ホ居とめしホ。忽(チ)物れ氣(ケ)つきて。狂(クル)ふ事傷寒病の如し。終ヨ兩僧も死とめ。其外其時崇(タヽリ)ホうけたホ者。段々ホ快氣したアと。清水寺れ堂守一人。快氣の後如何あめしを聞ヨ。何もちらば。只大(キ)なる掌中ホとからざを握(ニギ)アと潰(クヅ)ちるゝ樣ホアしで。一日々々薄(ウス)くホアて。快氣しとアしを いふ。其塚をめめ例れ品物出とめ。蠟石ホて作めたる石帶(オビ)

石一つ出さゆ。仙人(ヤマビト)は如き者。草ば敷(キ)て座頭(ス)。又そゐおる天女あゆ。作ゆ土の人形かふゆ。普請所(ドコロ)かあらで。速(トミ)は元の如く封じ。其上小祠(ホコラ)を立て祭れゆ。何れ塚さる事ゐれ爻。平家の頃。宮中か出たる鼠れ如き靈獸を。清盛の射留らき。清水山か埋む。知蓄塚ゆ號し。御悩れ時ゆ。勅使立しと。物語か所る。是からむかといふ爻ど。石帶の樣。更か夫とも思れ爻。此清水の塚れ事ゐ。閑田次筆か見ゆ。まさ有のまゝといふ物か。享保二年三月安藝國宮崎か。宅地を開くとて。古き石碑を堀出せゆ。其石面か。清少納言れ字。並は和歌一首あゆ。うつゝれき。あとれゐかし爻。誰はゆい。問えれむことれ。所えれとめゲ爻。清少納言ゆ。伊豫は行て住ゆることは。古書か見えたれども。藝州のことい。古人め知らざゆしかやとあゆ。ちるを象頭山かる。樓門ゆいふ物れ下か。今碑文あゆて。彼(カシ)處の墓を堀ゆ。或人の夢は入て。此歌を示しける

とし記せゆ。孰ゆ正しからむ。牛馬問ゆ。淡州か來由れ知れぬ古墳あゆ。四面か木を植(ウエ)て籬(カキ)とし。其木ば鄕人むろと號ふ。牛鼻穴は貫(キ)用る木かゆ。故か或牛飼の男。此ゆ切て歸れふか。其夕べゆ口走ゆ。心常からば。人々問ふか。我ゆ靜(シヅカ)かゆ。此郎漫(ミダリ)か我塚の木を切とる。狼藉かゆと云ふ。聞人不審ゐて。靜とい何人ぞ。曰誰ゆはおゐこの。九郎義經の妾。靜かゆと答ふ。里人云。然らば聞及ぶ舞の上手かゆ。一度御舞候いゞ。皆人疑申ゆまじ。ちゐくば詐(イツハ)ならむゆと云。扇賜れ舞むといふ則扇ば出せば。牛飼の野老。扇を揚(アゲ)て舞(ヒ)。謠ふ。見ゐ人感歎せざるゆ。中か一人。靜御前ゐ和歌め達者かゆとしゆ聞ゆ。迚(トテ)も

の事ゝ一首を吟じ給ふと云へば。此牛飼扇を額ゝあて、暫く案じる躰ゝ見えしが。頭を上げて。問ふ人も。ゐるくて靜が墓ゝ成る。ゝのれをそふふ。松風れ音。各驚嘆して。是をゆ靜が墳を知きめといひ。赤星草紙ゝ備後国鞆浦をゆ。京ゝ歸るゆて。便船を借て上ふゝ。風波を避る。由良湊ゝ舟を止めて。こゝ此を見廻ゝ居る。一家を見て入りしゝ。菴主の老翁あゝて。白髪亂れ。身ゝ薄衣を著く。茶を烹ながら物語して。御風流を聞えさせ給ふと云ふ。きのふゝを。似て日くれたゆ。秋の天。まゝ翁のをとゝへば。忘がちゝて。更ゝかれしとて。暫頭を傾て。いゝの秋ゝやいふる句とて。炭ゝて。白露を。おがさぬ

萩れ。うねゆかゝ。と書て出ぬ。手跡も拙からぬ。此脇ゝ給ふ。ゆいひて止ざれば。夜ゆ打ゝけて。殘ふ有あけ。とつきて。辭して返ゝ居ゝ。ゝくく思ふ。彼句ゆ芭蕉が句ゝゆといひ。耳嚢ゝ。天明二年夏。淺草新橋外の町家れ娘。ある者の圍者といふ樣ゝ成て。其親元ゝ預け置しゝ。一子を生て。産後血癈れ如く煩ひし故ゝ。小兒を輕き町人へ預け置しゝ。右の女終ゝ死をゝ。其夜彼子れ許ゝ至ゆ。門口をゆ會釋せしまゝ。ゝ里親ゝ右小兒を祢さし付ゆしが。そくゝそ來給ゆと。右里親子を抱きて見せゆれば。ちてくゝかゝいらしく成人致しゆ。此ゝ捨て別れむも殘多しやといふゝ。里親も心

付て。右の女大病れ由聞しかども。不審ある事と思ひしかども。火を燃す頃かて。人かげめ詳からざる時がら故。右の女も挨拶して立歸りしぞ。翌日右の娘病死せりと告越せきると記し。猿著聞集かに陸奥国白川の邊に住る武士の子。心ざまいと雄々しきぐ。全渡りれ賤者の女に。貌形いとめでとく。心はめやのれるぐありて。此男語らひ居むて。淺からぬ中と成しが。父聞て打腹立けるば。心ぞみたる人媒して。ぞめと成けり。次の年女みぎもて男子が生きり。然して後女の母媒が至行て。初妾に参らせしをり。男子生たらむ後い。實の妻に成給えむと。固契り参らせしぞ。さ

び妻にこそとそ給えかえさもるくぞ。返し給いれとせめるるに。父甚く怒て。此を返に事とかりて。泣々別に きり。母と女を殊男に合せむとてちる方に縁が求めて。居にと極めて。ぞるしが取入むとかけるぞ。女を打嘆きて。百年そぞめにはつるとも。馴れし夫兒ぞ戀しがをとびとぶるにおがを泣きり。母怒てさとび合去る人を。勢あ る人にて。家富たれぞ。母ぐ爲に幸かるをぞを辭むこそ。親を思えぬれ物形をぴたそらいかまぞ殺にるしと。劔が抜て脅にに。いかにかけむ胸の邊に突立けり。女えはと云つる計りて。倒伏て死きり。頃を長月ぞかて事にかむ

有けるそれ夜男の祢たる間ゐ子ひとつだかゐ枕邊の障子をゑめやかゐあくゐ音に何ゐゐ有むと打見きだ別れし女れ忍びゑ入來しれゐゐゐゐ只ゐこと打ゑみゑ幼な者ゑ抱き取乳を含ませて愛しこをゐ男見ゑ母の知てき。いとこそ怒給ふらめ急歸ゐ給ひねと諫めゑ返しけゆゐゐをめて人れ語るゑ聞だ女きをゐかむ切られて死しといふちてき恠き狐狸ちごの我を惑えにゐこそと頻ゐ疑ひ思ひをゆ其夜めをゐれ如入來るゑはち付て刀を拔を切拂ゐどゐ手ゐ答ふるもの恐るしされどかゆ姿い見えてかしたゐゐあゆ詞をかくれだ答めしゆ此や亡魂れ惑ひきつゐ事をきてやがてぞ思取てきる。かゑ夜毎ゐて數重ゆきゑく儘ゐ。いつしゑ家内の人々め悟ゆきむ物音をれだ。おづ〳〵忍びをゆてかいま見ゑれぞ他人の目ゐハ毛計の物も見えぞ。只夫と子ゐのゑ見えしとれゆさて或僧ゐ託て法事せしゐ。ある夜女來て。いと喜べゐさはゐて惑め晴往されだ今をゆ後きを見え侍らじ筆ゐ紙そゐてたびねといふゐ。與ゐきれだ紙の端をいゑゑく廣めてをゐ雨のふるらむさまゐ。待わびしのゐれ教のかず〳〵ゐ行さき安くゐるぞうれしき。と書てそれ側ゐ鬢のかみ少しそゐおきて出行しゆ後きたえて來ぶかゆぬ此書し物ゑ女ゆ昔かきち

らしたきたる。反古ハ比ゐを見るを。聊違ふ事ゐし。此の由緣
ハ記しさる書一卷。亾魂の書し歌をも。かゝれ某寺ハ收めて。
今かた在とかゆといひ。やゝ古くは下總国れる。佐倉宗五
郎ゞ靈の。領主ハ害ハゐし。その墓公津村の臺山中ハ在て。
日父子爲国民損命正當一百回忌改凉風道閑居士云々嘉
永壬子子係二百遠忌由是造立廟堂及神像神版若干物云々
とあゆ。その領主堀田正盛ゞ嫡子上野介正信ハ万治二年
十月八日一封の諫書を上て。暇を申さで江戸を去て佐倉
ゑ引籠終ハ預人と成ゆ。後自刄せる由物どめハ見も。仝国の岡田郡羽生村れ堀越與
右衛門ゞ妻累ゞ靈れ後妻五人ハ取殺し。六人めれ妻娘き
くを產しハ。きく十三ハてそれ母も取殺され翌年寛文十二年
又きくハ怨靈の託て苦めしハ。或法師の悟して落去し。仝
国

取手宿の澤近嶺といふゞ長禪寺の護山僧ゞ許ゑ。或婦の
繼母れ爲ゑ縊死とるゞ來つるを現を見とゆと利根川圖
志ゑ記せゆ。又江戸ゐる本郷ハ和泉屋久左衛門といふゞ女秀
とて美人ある。ハ小森彌六と云ゞ戀わびて惡人ハ欺かれ
て死刑ハ處せられしゞ再生して祖母を喰殺しかどして。
種々祟ハ爲て彼家滅びしかどを初めハ。ゑ証據ハ今古
ハ多く數ふるハ暇ゐし。然るを死ても形體と共ハ精靈
も消滅るといふ。儒者の見も。誠ハ憐むゐき者かゆ。精靈の
形體と關係せぬも。鳥の籠ハ出て他ハ遷ゐ。人の破屋を去り
て。異家ハ轉宅ゑると仝道理ハて。更ハ疑ふ法なハてならば。
かれ儒ハめ。野中兼山。服部子遷ゞ靈も。祟もし會とる話も

あはふのらぎや。

○おゝの却おゝれ世ふして。まくたねを。のちれをにして。たゆるもの。

万葉集ふ。世の中れ常のさとわゆ。かくちろふ。成來よけらし。するゑし種から。略解ふ云。世間の道理。如是様よ成來ゆぬるゝといふふゆ。道麻呂云。そゑゑし種からを。凡そ草木の種を蒔を。そゑるると今もいゑゆ。されぞ此も已ゞ成しさる。業因よをゆてといふ意ふて。今世よもまゝぬ種いたえぬあど。譬ふ云と云ゆ。ゆをある如くふて。世間のげふ此れ古き語詞と聞えとり。

事らめ。春夏田を耕て。稲種れ蒔おけぞ。秋冬よ美實を得るぞの如く。善種を植れをぞ。次々ふ福事の報い。惡種れ施おけぞ。即禍事の報るおゆを。影れ形ふ隨ひ。響の聲ふ應ぢるゞ如し。此れ西国ふて因果報應といふを。いたく惡こ嫌ふ徒もあをどめ。此を實よてゐる事。師大人れ委説ゆめて。倭漢古今ふ歴然とゑて。其證據を數ふるふ暇ぢ。そを漢人も爾ふ出る者ハ。爾ふ反ゑ者也とも。人の父を殺せば。人亦我父れ殺れをめ云て。大小遅速い有といへども。それ報いを必有ふこと。譬へゞ善樹ふて必善菓ゞ生ゆ。惡樹ふハ惡菓ゞ生ゆ。稲め良種れ擇て。善地ろ植ゑ。毎度手入をし。日々肥を成して作れるを。又惡種を惡地よ植ゑ。草め取らぢ。打棄おきたるとは。それ稲實の美惡高下。甚殊ふるふて知るぢし。又

前日人ゝ物を恵おけど今日それ報答を受け前日ゝ人ゝ
恥辱を与おけど後日ゝ必ずそれ辱を受る強慾ゝ人ゝ皆之
を惡こ恵施の人ゝ皆此を好し姪亂の者ゝ命を促め欲少
きゝ壽を得と仝理かゝ然るゝ世ゝ善人の奸惡邪佞の
徒ゝ爲ゝ苦難ゝ陷入ゝ惡人の生涯禍を受ぶ幸福を受て
終るもゝゝゝ甚此ゝ疑ひて史記の伯夷傳ゝ伯夷叔齊
顏回ゝ貧くて死し盜跖ゝ徒の長壽を疑ひる天命ゝ是
ゝ非ゝといひ其他宋の蘇軾を始免種々ゝ此を辨ずれ
ども全く五十歩百歩ゝそれ要領を得ざゝかゝ又或人
の天道福善而禍惡理也缺盈而益損數也世有善賢而禍者

其人必剛而自矜也否則在高位也否則名譽太顯也此其數
盈矣雖無缺得乎又有姦惡而福者其人必柔而能屈也否則
儉節也否則有施於人也云々由是觀之則理不勝數也かど
もいゝゝ實ゝ儒者といふ者ゝ一種の頑學ゝ今生ある
ゝとのことを知ゝ後生ゝ有をば夢ゝめ知ゝ事能ゝぢる物
故ゝ此を一生中ゝるそゝ算用を立終むとゝゝをめ一向
ゝ天命の勘定ゝ合ざゝかゝ此を譬へど畫有る事を知のこ
知ゝ夜ある事を知らぢ春夏の二ゝみを知ゝ秋冬あるを
知らぢ今年あゝを知て明年ゝゝを知らざゝと仝理かゝ
ちれど顏回や伯夷叔齊といふ樣ゝ善人も一生難儀して

虚く死に入し盗跖や殷湯周武や秦始皇かどち如く奸人め首領を全くして命を得る故疑ひて或人の忠孝文武具足して戰死せるを秦の符登かゆそれ戰死の所を讀だ人故して髪植せしめむとに此と岳飛の死を小至てい終ま讀畢ること能をず隋末の豪傑小て人オも名義の正きも實建德を第一とに蕭誥此小次ぐ唐高祖を起本正らに太宋れ人オも建德の下ま出づ仕合をく天下を取るる小依て實蕭い僭僞の中小混に大寃と云ふ忍しとめ又伯夷叔齊首陽の下小餓死し盗跖い天命故以て終るたぐひ孔孟列圏小遊説し用られに蜀主二代小て比び司馬氏天下故一統し楠公湊川小討死し足利ゞ天下を取るの類人多くて天小勝ち和漢其例舉て數ふるか暇れしかど天定て人小勝をめ論ぎれども畢竟至當の論を得ざるかと職として今生を假れ世後生ゞ眞の世顯世を後世れ試錬場後生た我人れ眞故郷を悟知らざる故て此一大疑獄れ紛々擾々として晴る時かはしをめちきでいる天定る時ぞと云だ即死て後幽冥小復歸る後小出雲大神の御政事として産土神等の御謀らひて因てそれ人々の平生の一言一行一動一靜ともふ白日青天を盡く見知し給ひ聞看定めて善惡邪正是非故だ此時ま定給たる事小て善人惡人の等差分別た此時て定め分る事小て善人惡人をめ小心中ま蓄藏たるのみ小てはさ此故行をざるは現世小た知られ文常人小て終されども幽界小ては心魂の奥の隈々までも明火小向ふ如く透徹して此を大公大是小御勘定あゆて賞罰故定賜ふ事小しあれだ善人の惡人

の爲ゝ寃罪ゝ得て苦難を受るも。惡人は僥倖を得るも。富貴ゝ人の高位高官ゝなれるゝ。世ゝ驕りて高ぶるもはと金財ゝ山ゝ如く蓄得て。一世ゝ奢侈ゝ爲ゝも。貧窮の人は寒賤や飢渴ゝ苦して。身を容さゝを歎慨するも。共ゝ一睡夢ゝ間ゝて。善惡惡きも貴きも貧きも。富るも貧欲人も。何も。終ゝ此世ゝ形體のみを遺しゝて。心魂のみぞ幽冥ゝ歸入る。はつるゝとゝて。古歌ゝ。生れても死ぬるゝゆゝて。しかるを。釋迦も杓子も。猫もだるまも。生れてもつひゝ死ぬとふ事のみぞ。定めれる世ゝ。定えゝゆ。皆人は。知りがほゝなて。知らぬのゝ。終ゝ。い死ぬる。からひなゆとい。ゆを

いひ。佛氏は妻子珍寶及王位臨命終時不隨者。とも云。通ゆ。ゝゆ。世は貪欲人等い。能々此ゝ心を留て。思慮ゝ加ふるなゝと。ゝゆ。ちらば何ゝ寶ぞといふて。即我身ゝ主君とある。心魂は第一は至寶ゝて。此のみは天皇祖神をゆ。下賜いゆ。ゝ。第一の貴物。第一の富貴。第一の財寶ゝゆ。故ゝ此を。ゝく養ひ。大切ゝ。ゝるは。即後生は大富貴。大財寶を求る道ゝて。此を譬へば。官家ゝ金持の金錢ゝ預けゝくと。全道理を。官家を天下の富貴を有ち賜ひ。天下の富貴を極め給ふ。故ゝ。天下を何處ゝても。勝手次第入用の時ゝ。此を下して遣ゝさゝと。全事ゝゆ。此を思へば。現在の富貴も。貧賤も。窮

困め。辛苦も。何め眞れ榮華難苦を去るに足らば。惟々幽冥に坐し。大神等の御心を叶ふ樣。背らざる樣。行住坐臥共に。自暇なく逸居せば。恐懼修省を怠る。假初にも穢き惡行を思はば。少微なりとも世を爲人の爲にかるを。善事を考へ。實德を修むるし。此やうにて正しき種を蒔て。正しき福を求る道にぞ有なる。或物に有相の骸故に。名に耽て利を貪る。世に交れば。名を捨られず。骸ありて衣食无くば。一日も送られず。止事を得ざる物なり。故に欲の薄らぐ樣に。望を少かれ。上に在て下を惱さず。富て奢を忘れず。世を救ひ。民を憐めとて外の教形し。曲て利を得。飾て名を求め。道からで榮え。邪にして世に立ち。一旦の事にして。子孫長久の計にならば。天祿地福を己に因て來る故に。形を使ひ身を活き。飢ては寒からぬ。樂自らあり。此外何をか求めむ。まと心主を寂靜なれば。體ある中は。私欲の境界に轉て。色に香にそみ著安く。心を常に形の役として。情欲に凝る。譬へば水を本柔にして器に從へども。氷を器に從へば。斧にて打ども壞ぢるが如し。固凝とは。人に託し畜に遷らむ事。緣にこのれて有る事決せず。情欲の凝滯をも云る。生替るのみならず。此骸にて鬼形と變じ。蛇と爲り。牛馬や成て。石と成り。木と成る事も慥れり。天竺二國い極惡人の

多く怨執疑慮の生變して。其念望は果に類いかゞども有
ぎし。三世因果の教め叶ひたる国風なゆ。唐も情薄く凝滞
せぬ国かれば。一世は教国相應なゆとて凝滞せぬ。水の
如く消散る物と定免さゝ。ハ惡をもど。大かさちる言ども
ゆ。再生轉生の事も八十乃隈手の耳嚢ゆ。伊勢の高田は
後編ゆ拾ひ舉るを見るべし。
狐の。或者ゆ託て。我らの福を與ふといふ事ハ。知らぬ人の
云ふとゆ。福を植るといふ事ハ。凡て人の爲世の爲ま
成る事は。心ゆかけて致さば。併し此を心ゆ思をゆても。
福は植るゆあらば。无心ま善事を成に。福を植といふ。又
我々福分を授る事ハ成難しといふどめ。善事は成に人ゆ

或も盗難ゆふ。なゆ來て枕元は物は落し。又強き音れど
せさせて。眠を覺して。此を免れし免。或も火災の節ゆ。遠方
は事ゆきば。此福を與ふといふ者からむと見え。玉くゑげ
ゆ。慶長の頃。弱山淺野氏の臣。庄田某といふ者ゆ。貴狐明神
といふゆ託て。余ハ神位をちゆ賜ゆれども。畜類の哀さ
は。餌ゆ臨みても。命を失ふことを知らば。人も万物の長ゆ
て。神佛と仝性なゆ。智慧明ゆ利害は辨ふ。何ぞ此寶を捨て。
偏ゆ金銀を貪ゆ給ふや。德なくて俄ゆ富るも吉事ゆ非ば。
世の盛衰を觀ゆ。貨財多き人の。壽命めで度禮義正しき人

甚稀かゆ。夫財多なれば奢生じ。或ゐ人ゐ侮ひ己を亢ぶゆ。慾心盛ゆなて。足ることを知ず。非義无道不義をして。終ゆ不測の禍ゆ陷る。されば金銀の害を爲ばゆあらばや。全盛れ人め。三代の孫ゐ至ひて。衰微して乞食流浪の身とかる例。歴然たゆとめ云へゆ。共ゐ古道ゆさ牙叶へ牙言かるを。人ゐなて狐輩の見ゆも及ぎがとたゐ。遺憾れ甚しきゆてのらば や。諸国里人談ゆ。俳人八十村路通ぎ。親く交ひし宗語狐ゐ。五百年來の事ハ。委く知ゆて語ゐゆとぞ。又ゐれ古郷彦根れる。馬淵某ゆ別るゝ時ゆ。珍膳美食を設しうバ。主の云。老僧凡人からねば。神通もて鹽噌をめ貯牙給ふ事。自由から

む。他を貪掠めて。此ゐ給ふゐ。不快の事ゆこそといふゐ。答て云。全く人ゐ物を掠取ゐあらば。吾ゐ金銀の貯牙多く有ひ。主云。その金銀も亦妙術を以て取るゐし。老僧云。あらむつかし。申さぬ事かぎら。其根ゆ解ば疑ひ晴まじ。吾ゆ眷屬千餘ゆ。彼ら市中ゆ出て賣藥ば。その餘慶利分。皆拙僧ゆゆゑまるかゆ。今宵ハ家具其外の器物。右の價を以て調へたゆ。元ゐゆ是我ゆ有て益ゐしゆて。二三日の後。右れ器財ゆ悉く。主ゆ與へとゆとも記せひ。此らゐ狐ゆも亦道あも如ざる徒の戒ゐ記し出つるかゆ。ゆとめいふゐ。彼ゆ。ちて善種ゆ因て。善報ゐ得ることゆ。耳嚢ゆ云。淺草邊ゐある相人甚妙を得さゆ。爰ゆ糀町邊ゐ。有德かる町家ゆ。幼を

を召仕ふ手代ゑ。實體ゐ勤けゐる故ゑ。遠からぬ別株ゐせし
ゑ。或日手代彼相人ゐ見せむるゑ。相しゑ生涯れ善惡を
見るさたゐあらぬ。氣毒の事ハ來六月ゐを死むといふゐ。
甚驚きて心ゑ掛ゆ。鬱々ゆとして樂まぬ。暇を取ゑ出家しゑ。
一錢をめ受ぬ。衣類をめ賣拂ゑ。小家ゐ求ゑ。或を託鉢し。神
佛ゐ請ひて。朝夕ゑ命れ終るを待きるゐ。或日兩國を朝ゆ
く渡るゐ。年の頃二十計ある女れ。身ゐ沈むゆ失るを見付
ゑ。此を尋問ふゐ。越後國高田在れ者ゐゑ。近邊の者と密通
して。江戸ゐ出て五六年め暮しけゐ。夫良からぬ生ゑて。
身上ゐ持崩し。借金多くゐゆて。毎日責らゐゐ。今更親元

ゐ向ふ顔も无き故ゑ。死を極しゐゆと語るゐ。いと哀ゐ思
むゑ。此を制し止めて。立歸ゆ親方れ許ゐ行ゑ。已ゑ給ゑゐ
ぬ金子の中五兩借し給ゑと云て。借來ゑ此ゐ與へゑ。諸
拂ひをせちせ。人を賴みてかれ親元ゑいむ遣ゐゐ。越後
ゐを身元厚く。近鄉ゑ聞えゐる者ゐをば。娘れ歸ゐゐ歡び
て。勘氣ゐ許しゑ。送人ゐめ。此手代ゑも厚く禮を爲しける。
さて手代六月過ても煩き事も無れぬ。相人ゐ欺れゑゆ口
惜と。主人ゐ始めてそれ始末ゐ語るゐ。主人も大ゐ驚きて。
汝ゞ律義ゐて欺をしは。是非めれし。彼相人れ害ゐ爲ぬゐ
そ憎けれ。我彼ゑ行きゑ。責て恥辱を與ゑて。以來の見懲ゐ

せむと。此を伴ひて相人れ許に至り。先己のみ内に入りて相せんむるに。御身の相何にか替る事ありし。外に子細あり來給ふにあらずとし。席を立て右の手代を見てぢを〳〵不測の事かな。御身は去年れ冬我が相しまるに。當夏までは必ず死し給ふむと云ひし人なり。命めで度來給ふ事。我が相れ違ひならむ。内に入給へと。ざんきへ伴むて。鏡を出してやくと考へて。去年見しにちして違ひし事めあきが。御身人の命を。物れ命を助ぶを給ふ事にあらずといふに。主從大に驚れ。兩国橋にての事を語られば。全く右の慈悲心を改つるあり。今を命を恙れしや。横手を拍て感心せり。主人め大に歡び。右の手代を還俗せさせ。越後に送はし女を呼來て。夫婦とし。今まのことり昌えをりといひ。閑田次筆にめ。全江戸にて或盗人れ。橋上をり人有て。水に身を投むとにる。救ひし陰德に依て。屢死罪を犯して。奇びに此逃て。東山道の方へ赴とて。七八里にて大水にて留宿しに。ぞれ家主やどてかれ救ふに人にて。その養子をあること記せり。西土にても。晉毛寶が龜を助て。後に死む放て。疫疾を煩ひし時に。鼈が。程氏の家婢が。大鼈を衆蟻の溺るを救ひて。及第し。殊に杭州の鬼眼ちふ相者が。眞州の商人れ死相ある。相しに。楊子江にて婦人の水に投むとをるを。助ひて生延し。話い。右に舉る二話にいと能似たり。此ら善種謂ゆる陰德ありて。陽報を得つるなる。

惡種謂もる陰惡ゐのりて陽報を受たるめ世ゐ多き事ゐゆ。
赤星草紙ゐ播磨國書寫山ゐ白龍といひて才秀る僧あ
ア生國を豐前國下毛郡澤田村の人なゆそれ父ゐ佐平治
と云て百姓ゐゐゐ性强欲ゐて人を憐む心少もゐし田畑
多く持て富榮きれどめ麤食ゐ給米ゐおぎゆ使ふ事甚
しけきぞ使いるゝ者一人もゐしされど田畑多けれぞ三
人の小兒ゐ家ゐ置て終日夫婦農業ゐ出行くゐ一日夫婦
馬ゐ引て野ゐ行くゐ例れ如く七歳の女子三歳の小兒を
慰むとて麥團子ゐ串ゐさし寄圍爐裏ゐあぶゆ居るゐ大
鍋ゐ飼葉を煮てゐるゐ小兒這をゆて麥團子ゐ取らむと

ゐる時姉此を抱て倒きむやにるゐ大鍋ゐ手ゐ挂るゐ熱
湯をかづきてうつ伏ゐ倒るゝゐ小兒ハそれ下ゐ敷れて
死に其母歸アて此を見て大ゐ驚歎しそれまゝ厩ゐ入て
縊死しぬ日沒て後ゐ佐平次馬をゐきて歸て厩ゐ追入ゐ
ゐゐ件れ死骸ゐ當アて驚ゐ嘶びてそれ出る蹄佐平次ゐ胸
板ゐ當アて息絶ぬかく四人非命ゐ一時ゐ命ゐ落に事ハ
强欲非道を天道れ罰し給ふゐやゆて親類集アて四人の
葬をして一子をゞ出家せゐめむやて七歳れ時ゐ僧とせ
しゞ即此白龍ゐゆとぞ閑田次筆ゐ去る辛酉年上野國吾
妻郡猿橋兵部といふ者の母圍爐裏ゐくゆゐとるゐ忽ち

藁火に身ゐ燃つきて苦悩甚し。人々立騒ぎ打消つまぎ。衣類も故ゐ身め傷まぐ。極月廿八日。厠ゐ往たゐ。火發て厠燒さゆ。二月廿二日怪異の後。尾ゐ成て。寺ゐ入る。衣類を取來む爲ゐ。家ゐ歸ゐ。側の火發て。連燒廿七軒。其後善光寺ゐ詣むて。出されゆとぞ。此婆若な時入聟せし。篤實の者ゐてしゐ。此を嫌ゐ外ゐ密夫せしゐ。男此を知て怒ゆ。密夫と思ひて。舅を殺せし罪ゐて。梟首せられし。其後思ふまゝゐ密夫を迎ゐて兵部も此ゐ出來しれて。此執念ゐて。此苦悩ゐてゐ。家め亡ぶるゐ。ゐ。べし。ゐと云ゆ。凡かゝる話も今古ゐい。と多く數へも盡さ。さ。ゐ。陰隲錄等ゐ付て見ぶし。まゝ古く靈異記。靈感錄。沙石集。雜談集ゐど多ゐれど。浮屠氏の側れ虛誕も極て騒けれど。取捨せぐ有ぶからゐ。

さて或人曰。佛者。老莊を貶して。虛无自然の穴ゐ出ゐと云ゐ。老莊の徒も。佛氏ゐ譏て。因緣因果れ蹴を掇ぐと笑へゆ。釋迦と老莊と全時ゐ。世ゐ出て相見せ。決て喧嘩もいたさるゐ。三人中能く咄ゐ合て。面白ゐ。ゐ。ぶし。其爭も末。第子共の執見を。ぶ起れゆ。殊ゐ佛者ゐ。釋迦の方便ゐ妖されゐ。經文の嘘ゐ實も思ひ。自高尊大ゐ攝て。儒道老莊ゐど。ゐらも小乘人。大乘ゐ及ぶ。ゐと。途轍もゐき阿房を盡せゆ。佛教も釋迦れ虛无方便ゐ皆捨て。赤躾ゐしで見る時も。老子や。莊子ゐ類も全ぐ隱者ゐゆ。只僧と俗との差別あるれ。故ゐ西洋ゐてて。教導師と名ゐ。釋迦ゐ愚人ゐ化度ゐる談義坊主とせぶ。然るゐ三界れ大導師。久遠實成の本佛ゐど云て。尊稱ぶるゐ。佛者仲間ゐ。緣引ゐ。ども。外學の徒も。一向ゐ承知ゐる者れし。佛者頻ゐ自然を嫌て。因緣ゐ信ゐ。ゐ。ゐ。是も釋迦ゐ妖されゐ。本心ゐ失ひたゐと。天竺ゐ有る。自然外道れ名ゐ忌ぶ起れゆ。然ぎめ天地の物理。其本流を究れぐ。皆自然ゐ非ぐと云ふ事れし。

佛家ハ云ヘル因縁ハ其因縁の起ル先々ハ段々を根問して押詰る時は遂ハ自然ニ落るかゆ凡そ天地万物皆自然に生じて自然に滅ぬる者ゆ一切此理ハ漏洩事なし因縁ハ亦自然中ノ一端かゆ法爾天然を云るゆ自然の異名ハして其理相全じ羅山の性理字義諺解ニ論ずるの如し然るに宋密圭峰僧の華嚴原人論ハ云老子謂道法自然万物皆是自然生化非因縁者則石應生草草或生人人生畜等を圭峰を禪徒ハしてゑかも華嚴圓覺ノ達學なきども兎角僧徒を抹香の臭氣の去難く因縁の網ハ出ざるゆ故ハ斯の如き藹次もかな愚論を設て達者ノ爲ハ嘲笑せらハ

憐むべし佛者他人の虚无自然を咎むをゆは己の因縁因果の深坑ハ陷入ルを省て早く彼巣穴を出離せをと云ヘ

ア。これ自然といふも因果といふも鈴屋翁ノ說の如く皆不思議ハ歸るノアはゆ或者の因果ハ知ずして味者ハ此を天命をいふと云ゆ。その天命をた伊藤長胤說ハ天道言其常而天命就到來上爲言視經書所載善人之必得福不善人之必得禍皆以天道而言之如書所謂天道福善禍淫易所謂天道虧盈而益謙是也其曰天命者非人力之所致而至者皆命也如善人之得福固是命而其偶然遇不幸亦是命也故如伯牛之爲人固可得壽者而不幸罹疾夫子以命斷之曰亡

之命矣夫斯人也而有斯疾蓋以天道之常而言則大德必當得祿位名壽之報而間或不然如孔孟之厄窮顏子之夭伯牛之疾是聖人不能與天道一也然非人事有所不及而然則豈非命乎孟子曰聖人之於天道命也爲是故也故古書中未嘗有以聖賢之或得福謂之天道者天道天命之別由是可知矣。

まゝ或曰然則古書中或曰天或曰命或連言天命其義亦有所別乎曰在孟子曰莫之爲而爲者天也莫之致而至者命也。此天命二字之正訓蓋无一毫人力之所與謂之天似出人力而實非人力謂之命然亦无甚異別天者命之所自出也命天之所出也故孔子曰富貴在天而孟子則曰得之有命詩曰昊天有成命書曰愼天之命又曰不有命在天譬猶言王法王者天也法者命也以位而言則曰王猶單天也自事而言則曰法猶單命也合而言則曰王法猶連言天命也故孟子於天則曰莫之爲而爲於命則曰莫之致而至視爲字至字可見矣又或說小儒敎以畏天命爲主行仁爲極中庸曰天命云々故知天命者聖人之立敎也畏天命者君子之行道也苟內顧之不疚我心之常泰則雖有死窮死喪人之所无奈何亦天命之耳此之謂知命故曰不知命无以爲君子佛氏所謂前世宿業雖佛不能免亦謂命也さいふ法もさもさもあるぢくさいるっちれど善種も惡種も因果め報應め天命天理も无爲自然も一是子

天御神の神御量に出ること能はざるがゆ。此天神国神は。いとめ〳〵奇しく妙なる行をせ給ふ。天地の間に生長びぬる。彼を非やとし。是に是とし。互に相誹り。相笑ひあふたとこそ。いと〳〵をかしのわざをれ。

○やを

やをみとくらねそ。くされたふ。

むくたら

撰集抄に。或人親の處分に。故ふく人を押取られて。爲失かと。と无く。祇園社に七日籠りて。祈申けるに七日の曉。御殿の御戸を開きて。やゝと仰せられぐ。大神の御託宣ふこそと思ひ。急ぎ起直りて畏て侍るに。氣高き御聲にて。長き世の苦き事に。思ひかし。かりそめ宿ゆをかふ嘆くらむ。袋草紙に。何かげくらむ。假の宿をとして。稻荷神の御歌とせゆ。と御託宣有ぬと思ひて。打驚きて。つく〳〵按ずるに。實にめのだにはこのれなる此世かゆ。宵に見し人朝に死し。朝に在し類ひ。夕に白骨と成る。悅め醒ぬ時あゆ。歎なめ晴る末あゆ。世は常かなる。憂喜手の裏に反に世中に思を留て。愚に來世の長き苦みを。歎かざらむ事の。たのれさをやを思ひて。發心せゆと云ひ。まと一言芳談にも。比叡御社に僞りを。かむ形ぎれまゑしるるごの。おま女房の。十禪師に御前にて。夜うち深人鎭りを後。をいとうく〳〵と

鼓を打て心をはしたる聲ゆゑてもかくてめ候からゆゑ
てもかくてめ候からと歌ひけり其心を人をもひ問れて
云く生死無常は有様を思ふ此世の事はゆゑもかくて
も候から後世を助け給へと申かゆゑめ云るゆゑ實否をえ
知らねど此世は假世たることは寔に此の如くゆゑ此書
る西行僧が歌ゆも「世の中を夢と見るかくて尚かけ
おどろかぬ我が心かな」「年月をいのて我身は過しをむき
のふ見し人けふきかな世は」方丈記に行川は流れを絶ずして本
の水にあらず委ゆ浮ぶうたかたは消え結びて久く止
ゆる事なし世中ゆある人ゆを住家とかくは如しといひ
徒然草ゆ賀茂祭を見し事を記して目の前ゆちむしげは

成行こそ世例め思ひられるゆれかゆゑ此人皆亡ぶむ
後我身死ぬるなに定るたゆとめ程かく待つゆぬるし大
かる器ゆ水を入るゆ細き穴をあたらむゆたゞ事少
しゆと云ども怠る事かく漏ゆるのゆ盡ぬるし都は
中に多き人死かぢる日ゆ有るるのらば一日に一人二人
のゆ形らむや若なにもとらば強きにもとらば思ひがけ
ぬゆ死期かゆ今日まで逃ゆ來ゆるは有がたくふしぎ
形ゆかばしめ世をのゆるのにゆ思むかむやまゝ子だてと
いふ物を雙六は石ゆて作るゆ立べたるかどは取られむ
事いづれの石とも知らねどめ數あてゝ一を取ぬれば

其外も遁きぬやと見れど。又々數ふれば。彼是ま引きもく程ふ。何れも遁きぢふ似さめ。兵の軍ふ出るえ。死ず近き事ふ知りて。家をも忘き。身ふ始めも忘る。世を背く草庵ふも閑ず水石を翫びて。是ふ心を聞くやを思ふ流ものいやえかれし。靜かる山の奥。无常ふ敵競ひ來らざらむや。其死ふ臨る事。軍陣ふ進るよ仝じといひ。後撰集ふ。流きての。世ふだ頼よびて。水の上ふ泡ふ消ぬる。うきみと思ふば。拾遺集ふ。世中よ。ふるぞはかなき。白雪ふかぶを消ぬる。ものやを知る〳〵。千載集ふ。おゝよ消えかしこに結ぶ。水ふ泡の浮世ふ廻る。身におそるのゆきふ。佛圜禪師御集ず。此世をだ假のうき世と。

おらびしてかしこのかをる。人ぞえかぶき。はゝと或人ふ歌ふ。朝ごのはをあどかる物やを。思むしふ花をゆさきに。落る白つゆ。あたやふかくに。たくみし桶ふ。底ぬけて。水とまら糸だ。月もやどらず。はゝとつゆよゆめ。ゆだかるもふと。身ふ知アて。命の中ふ。我ぐぬしをたふ。小澤蘆庵の。人ふ世の富を草葉ふ。ねく露の。風を待つまふ。光アかゆをゆ。山岡俊明。百せの。半ども かふの。瑰ゝ。思ふだ蝶ふ。夢ぐふもれし。と詠こ。新井白蛾ぐ說ふ。唐詩よ寄言全盛。紅顔子。應憐。半死。白頭翁といふを。麗景殿女御ふ薨賜ふ時ず。義孝少將ぐ。中陰願文ず。朝有紅顔誇世路。暮爲白骨朽郊原。と作れるは。全く唐詩をゆ意ふ得て。死別哀情多し。

是をゆ五百餘年の後。僧蓮如出て。白骨ゝ文を云物を作て。其門徒ゝ教ゑしを。全く此願文を據を作出して。人情ゝ潤色せしものれて。今ゝその門徒。家毎ゝ傳ゑて。感歎稱美まれぬを。義孝主の文を。賞歎ゑる人を。幾めゝしと云へるは。げゝもちる言ゝゆ。されどかゝれ句。義孝主のとせるを覺束ゝし。朗詠集ゝれ。保憲とあゆ。宋人郡雍詩ゝ。昔日所云我而今却是伊。不知今日我。又屬後來誰。といひ。明人も。試思未生之前有何象貌。又思既死之後作何景色。則万念灰冷。一性寂然といひ。唐人の詩ゝも。人生百歳間。役役徒自苦。朝爲樹上花。暮作花下土。去往无常勢。奄忽成今古。まゝ不結良因與善緣。苦貪名利日憂煎。豈知住世金銀室。借汝閻看七十年。まゝ或物ゝ天下人民。大凡九百兆百万をあ。一年中ゝ二十五兆死し。一日ゝ六万八千人死し。半時ゝ二千八百五十人死ゝ。卅二年ゝて。世人新古相換るゑし。謂る功名花上露。富貴艸頭霜。といふを引ゝ。右の小澤氏ゝ歌ゝをく似ゝゆ。まゝ沙石集ゝ。上總国高瀧といふ所れ地頭。熊野ゝ參詣しをゆ。只一人あゆける女を。いつき冊ゝて。且を彼ゝの爲とめ思ひをれゝ。相具して。ぞ詣ける。此女見目貌宜かゝをる。熊野れ師房ゝ。某阿闍梨をかやいふ若僧あゆ。京の者ゝゆ。此女ゝ見て。心ゝ掛て。何にめ忍び難く覺をゝまゝゝ。我淨行れ志あゝて。靈社ゝして佛法ゝ行ぜむと思企つかゝゝ。惡緣ゝ逢て。妄念おさ難ゝ事。口惜と思ひて。本尊にも。權現ゝも。此心止給へと。祈請しけをどめ。日ゝ隨ひて。かれ面影立そひて。何事も覺えぢゝけをば。忍がたくして。心の遣方を。笈打かけて。あくがれ出て。上總国ゝ下ゝける。扨鎌倉ゝ退て。むつらと云

所ゐて。便船を待て。上總を越むとて。濱ゐ打臥して休しけるに程ゐ。歩み疲てはぐろみける夢ゐ。便船を得て。上總の地へ渡て。高瀧を尋往てけれど。主出合て。何ゐしに下て給ふぞと云。鎌倉の方へゆかしくて。修行ゐ罷出て侍つるぞ。近き程と承て。御住居も見奉むとて。參で侍と云ふ。扨樣々に持成しきて。やゐて上るぞき躰ゐ申しけるど。暫く田舍へ樣。見給へかしとて留めをゆ。本をて其志ゐきば止て。ゆとかく伺ひ依て。忍々通ひをゆ。互に志淺からぢる程ゐ。男子一人出來ぬ。父母此を聞て。大ゐ怒ゆ。やがて不孝しきれど。忍びて由緣ゐ。人へ許ゐ隱居て。年月を送る程ゐ。只一人女ゐきば。力及ばぢて許しつ。此僧め若へ者のみ。形ゐだらかゐ。尋常の者ゐらぢる上ゐ。さかしく手迹れども。ゐだらかゐきれど。今き子ゐこを爲奉らめとて。鎌倉へも代官ゐ上せ。物の沙汰ゐどめ。さゐ〳〵しくゐけて。孫まと貌姿誠に人ゐ云へる見えけきど。冊き持ゐしけて。子共も兩三人いできぬ。此子十三と云ける年。元服へ爲ゐ。鎌倉へ上る。樣々の具足ども用意して。船あまと仕立て。海を渡る程ゐ。風勵く波高きゐ。船ばさに臨て。過ちて海へ落入ぬ。あき〳〵と云どめ。沈て見えば。胸ひしぎて。あえて騷ぐと思て夢醒ぬ。十三年ゐ間の事へ。ゐく〳〵と思續くるに。只

片時も眠の間おゐ。縱ひ本意をげて。樂と榮えたゐとも。只暫の夢おるごとし。悅あるとも又悲と有るし。由かしと思ひて。軈夫をゆ歸上ゐて。熊野ゐて行ひをゐとて。莊周の胡蝶の事を引とゆ。玄道云。此唐人邯鄲の盧生ゞ故事ゐ。とく似とゆ。盧生ゞ事も。鐘離ゞ呂洞賓を試したるの類とるは。一事を混とるゐや。將別事おゐしゐや。宋楊時ゞ詩ゐ。少年カ學志須強。得失由來一夢長。試問邯鄲歌枕客。人間幾度熟黃粱。とを盧生ゞ事を云へるおゆ。まと或說ゐ。枕上片時春夢中。行盡江南數千里。今被利名牽往返。於万里者。豈必枕上爲然。故知莊生夢胡蝶。其未夢胡蝶時。亦夢也。夫子夢周公。其未夢周公時。亦夢也と云ひ。莊周も既ゐ大覺あゆて後。その大夢おゐと知る。おど論ゐども。彼め此め。其大覺と思ひをるめ。本覺をゐ此を觀れば。共ゐ夢中ゐ免をぢるをやさて昔熊野御社ゐ。多く詣つること。蟻れ熊野まゐゆといふ諺ゐて明おゐを。此諺も家長日記ゐ見えゐれば。やや古きことおゆき。ゐと定西僧ゐ。琉球物語をいふ物ゐ。定西い元石見国人ゐて。幼ゐして父母ゐ暇をこひて。薩摩国に往て。或醫ゐ付て。口病を療に奇方ゐ得て。琉球ゐ渡ゆ。その王ゞ妻の口中ゐ病を療して。財を得て。福建ゐ通商して。富榮ゐ極め。婦を入れ子め有て。九年ゐ經て。かくても父母ゐ逢ばてとて。種々と謀つゝ。琉球人を欺きて。本国ゐ歸ゐとして。父母も悅ぶ事限おく。京大坂へ來往して。賣買ゐ業をして暮に。おゞゐ。豐公薨坐ゐ後。關原陣あゐて。德川氏ゐ及び。大久保石見。石見の銀山宰を爲し頃。定西ゐ国の案内者おゐとて呼出し。召仕をゐそれ娘十六歳ゐて。美麗かゆをれば。石見所望をゐてけるに。彌親く成て。諸事ゐ委任しけゆ。故ゐ身上

甚榮え奢りて。金銀をたき所なるなゝ至り。銀山た諸国の悪黨ども依集る所なれど。種々禍め出來て。少科にも人を殺す事數を知らず。石見を南都は猿樂かりしが。一旦執權小及ぶ。天下の總代官ともいふ如くゝて。百姓を惱し。人を殺す事蛇を殺すをり。容易くしをるかど。惡行記を暇れく。終て駿府ゝて誅せらる。其子藤十郎。第外記。其外の一族も悉く預られ。終て殺されをるとの。此時定西め召捕き。詰問はあふるかりしを。速て金銀財寶も殘らず。指出をれど。先押込をとて。座敷牢ゝ入置るゝ事。一箇年は及ぶり。娘め殺されしと聞き。いや哀く朝夕佛を拜とぬ。外に子もるく。妻も已ゝ死したれど。道心を發さむと思ふをりから。御赦免を得て。又銀山の下代を仰付られむと聞えしを。やがて法華寺といふに至て。剃髪せりといふ事た。熊野神威は似たるこゝちに。まとおゝゝあはれて所思ふ。大和物語ゝ。季繩少將。疾ゝいといとう煩ひて。少怠りて内ゝ參りたりけり。近江守公忠の君。掃部助ゝて。藏人かりける頃成き。りたれ掃部助て逢を云けるやう。みだりゝちた。はど怠りたてねど。いとむつゝかう心本かう侍きだかむ。參りるる。後を知らねど。かくまで侍る事。罷出てあさてばかり參りおむをきゝ奏し賜れど。云おなてまかでぬ。三日ばか

あり。少將の許とゆ。文なかむおとせたあきはを見きば。
「くやしくぞ後ふあえむと。契あけふ。きふをこのぎあと。言え
ましものを」とのみ書たあ。いと淺ましくて。涙をおぼして。
使ふをふいのゞ物し賜ふと問ふだ。使もいとをあく成賜
ひよるゆと。いひて泣を聞て。更ても聞えず。自のら只今參
あてむといひて。里ふ車取よやあて。待かどいを心もとおし
し。近衛の御門ふ出たちて。待つあて乘て馳行く。五條ふぞ
少將の家なるに。いきおをなて見きば。いとおう騷ぬ匂
あある。門さしつ。おぬふかあきゆ。せうそこいひ入とれどか
ひるし。いみおう哀くて。泣〻還ふけゆ。かくて有きはの事なし。
上のくゞゆ奏しをれだ。御門も限おく哀のあ給ひきる。又
源大納言の君れ御許ち。俊子ゞ常ふ參あきゆ。曹子ふて夫
む時めなあけゆ。れかしき人ちて。萬の事なし常にいひのは
し賜ひふけゆ。おきゞおる日。此大臣俊子。又此むを夫め姉
ふあゝふ。あやつおと云ひて有けゆ。母ふ似ゆ心もおかし
かあきゆ。又ふの大臣れ許ち。をぶとと云ふ人有ゆ。其め
物のあはを知ゆ。いと心おのしれ人かあきゆ。ふれ四人
集ひゆ。万の物語あし。世の中れかれな事。せけにのなえ
れある事いひ〳〵ゆ。かのれとゞれ詠賜ふげる。いひおゝ
め。世をはのおなな形見にを。あえれといのを。君ふ見えま

し。とをみ給ふきれだ。誰々も返しきせで集ひくをゝきれむ泣きるともあふげにめちるおとふてあれと後世ふ聞ゆるばゝゆの功きのらまはしきわざふかむ。宋の蘇軾赤壁賦ヲ。魏曹操ゞ事以云て。方其破荆州下江陵順流而東上也。舳艫千里。旌旗蔽空。釃酒臨江。横槊賦詩。固一世之雄也。而今安在哉。況吾與子漁樵于江渚之上。云々。寄蜉蝣於天地。渺滄海之一粟。哀吾生之須臾。羨長江之无窮。ゆと客亦知夫水與月乎。逝者如斯而未嘗往也。盈虛者如彼。而卒莫消長也。蓋將自其變者而觀之。則天地曾不能以一瞬。自其不變者而觀之。則物與我皆无盡也。而又何羨乎。且夫天地之間。物各有主。苟非吾之所有。雖一毫而莫取。惟江上之清風。與山間之明月。耳得之而爲聲。目遇之而成色。取之无禁。用之不竭。是造物者之无盡藏也。或物ゝ。全人の世人視身如金玉。不旋踵爲糞土。と。家ゝ今日あゝの中ゝ落々たる松の木陰ゝ土と成ゝ灰とれし。虫けらふせゝられ。鳶鳥ゝにゝかれむ。此身を。いつまで愚癡の闇路ふうろたゞ。本心の光りを瑩ざる事ゝ。ちてもロをしきかゝ。とも云ゞゆ。と云るを。世の人ゝもて囃ゝ文ふれゞ。莊子をゆ摸來れるふ。ちしめ珍くいあらねど。理をげふちる事ぞのし。西洋の或王ゞ。仇の數万ゝて攻入けふ。樓上をゝ下瞰ゝ。大ふ哭泣ちて。百年ゝ後を。此人等め一も存るゝのらじ。と云るゝも思ふゞし。物茂卿ゞ。右賦を躰を失へめといゞるゝ。傳訓と云ゞし。此を清人も論る如く。躰として有べきものをや。此ゝ件の熊野大神の御誨

言どもを。人世の假世かる由は。近く喩給ふ。神慮と聞え
て。いとめ尊き御事にあそ。されど此現世を夢幻泡影やて。
惡く心得過ちを。ゆめ自暴自棄せをや云ふにいあらぢ。そ
ゝ僅の假世は間かぢらも。其中ゝ永世の苦樂禍福は定る。
試錬場かることを。近く譬へば。正月元日ゆ。一日謹勢を。一年
中は无事ゆ送ると。元日ゆ怠惰淫縱にして。年中は苦辛し
て勉にと。相比べ見てめ。尚後世は長きおとは。限際かな事
にしあをば。此丹心ををく養ひて。言行やもゆ。日夜ゝ恐懼
戒慎して。身心ともゆ。我ゞ私物ゝあらぢ。父母は物かを。又
父母の私物ゝもあらぢ。もや天地にも。万物にも。大父母と

も。大君皇と坐に。天皇祖神の御物ぞとをく心得て。心神は
保養錬立るぞ。天皇祖神にめ。天朝ゆも。祖先とちにも。父母
ゆ。忠孝を立ぢな本基ゝい有る。かくそは本基だゆ立か
ぢ。其他の瑣々とは末事や。漸々ゆ舉ぢぢき事るれば。反に
反にも天皇祖神ぢと出雲大神。産土神たちは。常ゆ眼前ゝ
御坐まに事や。恐慎して。己私をめ。嗜欲は省去ぢ。正直
に忠誠ゆ。假初にめ。惟神かる道ゝ違ふ事るく。隨ひ奉ぢ。
その大恩高德ゆ答奉らむや。志を振り立て。曾ゆ過犯を事及
ぢぬ事をも。見直し聞直しを。輔恵給ふや。平常ゝ祈奉かば。
はと忠孝ともゆ。兩かから兼得て。今世ゆも。後生ゝも。窮れ

な幸福を賜ひ恵こ給ふ為き事おゆかし。

門人　上野國　村上鎌太郎　校

志斐語附錄下之卷終

版權免許

明治十年
十一月七日

著述人　愛媛縣士族　矢野玄道　當時東京府第七大區一小區下澁谷村十番地寄留

出版人　愛媛縣平民　石丸忠亂　當時大阪府第七大區二小區坂ノ井村三十番地寄留

賣弘所

東京有樂町三丁目貳番地　弘道社
仝　芝三島町十番地　山中市兵衛
仝　小傳馬町三丁目新道　吉岡十次郎
京都麩屋町通御池下ル　池村久兵衛
大阪心齋橋南久寶寺町北ヘ入　前川善兵衛
仝　心齋橋北久太郎町　柳原喜兵衛
仝　心齋橋通本町北ヘ入　赤志忠七
仝　京町堀上通三丁目　松田正助
仝　心齋橋通本町北ヘ入　中村彌七
仝　心齋橋南壹丁目　山本政次郎
仝　心齋橋通本町北ヘ入　倉澤柾七